
父親の品格

金地院 豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父親の品格

【著者名】

NZマーク

N3850P

【作者名】

金地院 憂

【あらすじ】

友人にタイトルを決めて貰つてから書きました。

「雄大、それが気に入ったのか。」

今年から幼稚園に通い始めた息子の、小さな手を覗き込みながら、私はゆっくりと尋ねた。

雄大が小さく頷く。

犬がモチーフになっている小さなスリッパを、真新しい毛糸の手袋を纏つた短い指で掴んでいる。

私は年季の入ったダウンジャケットのポケットから財布を取り出し、売り子の若い女性に百円玉を5枚渡した。

靴を脱いでスリッパを履こうとする息子を止めながら、お釣りを受け取った。

手の中の鎧びた十円硬貨が、なぜか重々しく感じられた。

私の出張の準備で、遊園地を中止にされた息子への罪滅ぼとして、隣町のフリーマーケットへやつて来た。

行きの車で拗ねていた息子も、思わず掘り出し物に機嫌を取り戻した。

帰り道の間ずっと、雄大は布で出来た仔犬を大切そうに抱えていた。

「脳の一部に、障害が見られます。

今後の観察を要しますが、何か機能に問題が起ころる可能性が有ります。」

待望の我が子に出会った翌日、私と妻が医師に言われた。

私には、それが死刑宣告のように聞こえた。

驚きと不安感で、何も言えなかつた。

「それが、どうかしたんですか。」

私は目を見開いて、声の主の方を向いた。

そこには、まるで私に夕食のメニューを聞かれた時のような、いたつて普通の表情を浮かべる妻がいた。

この時ばかりは、自分の選んだ人生の伴侶に、私は度肝を抜かれた。

落ち着いて担当医の説明を聞く妻は、隣で目を伏せていた私の何倍も立派に見えただろう。

その後、雄大には言語障害が残つた。

いろいろと神経質になっていた私と対照的に、妻は予定していた通りの育児をこなした。

障子を破つた時には眉を吊り上げて叱り、一人で靴が履けた時には

手放して褒めた。

父親の過敏な心配と母親の大きな愛情を受けた雄大は、どんどん成長した。

先月の入園式では、隣に座っていた男の子よりも、文字通り頭一つ大きかった。

「ただいま。」

寝てしまつた雄大を背負つて、妻に買つてきたスリッパの紙袋を手渡す。

「あら、可愛いじゃない。

あなたのセンスも見直さなくちゃ。」

袋を開けた妻が目を輝かせた。

「それ、雄大が選んだんだよ。」

妻は驚いたような顔をしたが、すぐに優しそうに笑つた。

「そつか。

あの子が物を欲しがるなんて、初めてなんじゃないのかな。」

紙袋をテーブルに置いて、大袈裟に伸びをしてから、雄大を寝かせに行つた。

上着をハンガーに掛けながら、ふとスリッパに目をやる。

土踏まずの辺りから、色褪せたタグが見えていたのを見つけてた。

”中西雑貨店”

他にどんな商品があるのか。

素朴な好奇心から、インターネットを繋いだ。

その雑貨屋にはホームページがあり、一通り商品を見た後、何の気無しにスタッフの紹介ページを開いた。

一番上の店長紹介を見た私は、息を飲んだ。

中西涼子。

苗字[ひこ]こそ違つが、顔には昔の面影が残つていた。

瀬川涼子。

父の転勤で都内の中学校に編入するまで、ずっと同級生だった彼女に、私は密かに想いを寄せていた。

今彼女は何をしているんだろう。

気が付くと私は、店舗の住所を手帳に書き[記]して、玄関を飛び出した。

まだローンの残っている愛車のアクセルを踏む足に、自然と力が入るのを感じた。

店に着いた時には、日が沈みかけていた。

駐車場に車を停めると、深呼吸してからドアを開けた。

店の入り口には、木製のひじ掛け椅子が置かれていた。

いざ店内に入ると、涼子はカウンターに立っていた。

僕を見た途端、涼子の顔に満面の笑みが浮かんだ。

「えつ。

遠藤くんだよね。

中学2年生の時に転校しちゃった、遠藤博くんだよね。」

頭のバンダナを取りながら、ゆっくり近づいて来る。

「買ったスリッパのタグを見てホームページを開いたら、瀬川さんが店長なんだもん。

俺だってびっくりしたよ。」

私も口元が緩む。

「全然変わつてないじゃない。

髪の毛は少し薄くなつたけど。」

涼子が意地悪く笑う。

「もう言つ瀬川さんも、すっかりおばさんになつた氣がするよ。」

私は上着を脱ぎながら答えた。

「ひつどーい。

いつも私を馬鹿にするんだから。」

わざとらしく顔をしかめた涼子は、僕の手からジャケットを奪つて、レジの横に掛けた。

それから、お互の近況報告など、他愛ない話が続いた。

「そーいえば、瀬川さんは今は中西さんなんだよね。

いつ結婚したの。」

不意に私は尋ねた。

「もう10年も前だよ。

今は…一人ぼっちだけどね。」

今まで笑っていた涼子が、突然目を伏せた。

「えつ。」

私は後悔した、がそれより早く涼子が口を開いた。

「結婚した次の年にね、女の子が生まれたの。

でもその子には、裕美には生まれつき障害があつたの。

それで私は仕事を辞めて、育児に専念したの。

そんなある日、友達の誘いがきっかけで、自宅でも出来る事務仕事を始めたの。

当然、裕美の面倒も見たわよ。

でも、段々忙しくなつてきたの。

幼稚園が振替休日で休みだつた日に、動物園に連れて行く約束をしてたの。

それなのに仕事が間に合わなくて、結局裕美をほつたらかしにしてた。

それを見て怒つた旦那が、裕美を動物園に連れて行つたの。

その行きに、二人は衝突事故に巻き込まれたの。

一人とも即死で、病院に着く前に死んじゃつてたんだつて。

私は自分を恨んだ。

裕美との約束を守らなかつた事。

自分の仕事に没頭した事。

何回も死のうと思つた。

でも、なんだか裕美に止められてる気がしたの。

だから、裕美が見れなかつた動物を作りながら、私は生き続ける
の。」

私は何も言わなかつた。

何も言えなかつた。

帰り際、涼子に尋ねられた。

「遠藤くんは、今何してるの。」

「…息子との約束も守れない、駄目な父親をやつてるよ。」

そう答えた僕は突然、決心したように携帯電話を掛けた。

「もしもしし、部長ですか。

本日をもつて、私は退社いたします。

「これから、ちやんと父親になりたいんです。」

一方的に用件を伝えると、部長の怒鳴り声の途中で電話を切った。

「これでフリーターのダメ親父だ。
働き口を探してるんだけど…。」

店の外に張られた店員募集の張り紙を見ながら、涼子に聞いた。

「月給25万、週休0日、育児休暇は週2日、ビバ。」

涼子が笑いながら尋ねた。

「明日…いや明後日に面接に来るよ。」

そう言って私は、ローン返済の遠退いた車に乗り込んだ。

明日は、絶対に遊園地に行こう。

手に持ったサイドブレーキは、驚くほど軽かった。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3850p/>

父親の品格

2010年12月10日23時55分発行